
だいつっきらい！！

いちごサブレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だいつつきらい！！

【Nコード】

N0217X

【作者名】

いちごサブレ

【あらすじ】

私、栗原 彩里は今年高校生になり、悪名高き私立高校。”師範高校”初の女子生徒として入学する事になった。それだけでも憂鬱なのにストーリーカー気味の幼なじみは引っ付いてくるは、シスコンな兄貴はやたらと絡んでくるは、クラスメイトも変態的で……。・心から、普通の”女子高生生活”がしたい。そんな少女と、バカで変態でどうしようもない男子達による青春ラブコメ！！

はじまり

桜が舞い散る4月

私は今日、高校生になる

今日からの3年間、私の身を包むのは紺のスカートと赤のスカーフが特徴的なセーラー服ではない

此の身を包むは紺のブレザーに赤チェックのスカート

ブレザーには交渉が刺繍されておりこれを見るたびに私は本当に此処、”私立師範高校”に入学するのだという実感がわいてくる

周りには私と同様のデザインの制服を着た生徒達がたくさんいる彼らが在校生なのか新入生なのかまでは分からない

けれど中にはこの3年間で時間をともにするものがあるかもしれない
そう思うとなんだかこれからの人生が少し、楽しみに思えてくる

そう、そう思えば……

お……思え……ば……

……いや、やっぱり無理だ。ムリにもほどがある

だって私は

・ この悪名高い師範高校、始まって以来の初の女子生徒なのだから……

第一部 第一話

周りの人間が、私を見ているのを感じる

別にこれはうぬぼれでもなんでもなく事実

だって、此の空間内で女子は私1人だけ。後は全員、男子、男子、男子……

いや、覚悟はしていた

本来、共学校とはいえ、その悪名故に実質上男子校のようなところ
に入学したのだから

家は貧乏だ。とてつもなく、貧乏だ

入学費、授業料共に全て免除してくれる学校なんて此処しかなかった。だから私は此の学校に入学した

此の学校にとって私は恰好のイメージアップの為の道具。それでも
いい

私に他の選択肢はない。

私は此処で3年間、青春を謳歌すると決めただんた!!!

そう、女は度胸。女じゃなくても人間は度胸が大事!!!

絶対に……絶対に此の高校で楽しい高校生活を送ってやーーーーー
ー

「あ・や・りーーーー!!!」

さわやかな男の声が私の背後からした

そして、背中に感じる暖かい感触

ふわり、と言った感じで大きな腕が私の体を包み込む

「ああ、あやり。合いたかった。もう、なんで一人でさっさと学校に行っちゃうの？俺、寂しさで死にそうだったよ・・・？」

そう言って口を尖らせるのは私の幼なじみの神代 新

色素の薄い肌と髪。長身のくせに彼が浮かべるその笑顔は人懐っこい子犬を連想させるソレで

まるで、漫画やゲームに出てくる好青年をそのまま具現化したような男・・・

そして、私はこの男の事が

「い・・・い、いつ」

「ん？どうしたの。あやり」

「い、いつっ！いやあああああああ！！！！」

場所もわきまえず叫んでしまう程に、大嫌いだ

「な、なななななんであんたがここにいるのよ！！」

「なんでって、今日から一緒の学校に通うからだよ。ほら、制服がいつしょ」

「いつしょ、じゃない！！あんた、確か青果学園に通うはずじゃ・・・」

「やめた。だって、あやりと同じ高校がいいもん」

「や、やめたって・・・な、何考えてんの!？」

「あやりの事考えてる」

「気持ち悪い。このストーカーが」

「ストーカーじゃないよ。いわば俺はあやりの愛の奴隷さ」

「お前、もう出頭しろ」

どこの世界に競争率の激しい高校を蹴って、試験を受けずともはいれそうな三流校に入ろうとするバカがいるのだろう。おそらく、こいつだけだ

「ほら、あやりっ。一緒にクラス割の掲示板見に行こー」

「全力で断る!！」

「えー、やだやだ!ほーら。お手で繋いでいっしょにいこー」

「ぎ、ぎやあああああああ!さ、さわるな!ふれるな!!

さぶイボが出るっ!！」

「ああ・・・俺はあやりのその、さぶイボでさえ愛おしいよ」

「はーなーれーろーっ!っ!お願いだから私から離れてくれ!」

「駄目だよ、そんな事。愛し合う二人が離れるなんて・・・」

「やめてください!マジ勘弁!!お願いだからそんなおぞましい単

語は口にしないでっ!！」

此処まで言っつて、ようやく新が私の体に絡ませていた腕を解く

自分の腕を見ると、まだ、さぶイボがたっていた

「じゃ、じゃあさ、あやり。下駄箱のところまででいいからいっし

よに・・・」

「いや」

「じゃあ玄関のとこまで」

「いやっつて言っつてるでしょ!」

「な、なんで!?!なんでいやっつて言っつなの?」

「!?!?!っ!っ!だからっ!私は新のことがだいっきらいなの!そ

れこそ、さぶイボが出る程に！」
「————っっっ！！？」

何度も口にしたセリフ

それこそ、この男に出会ってから約10年間、毎日言ってる気がするそれが一時期なくなつた事もあつた中学1・2年のとき。やっと、こいつから解放された気がした。ようやく、まともな学生生活が送れると思つた。うれしかった
・・・なのに、いつの間にか。また、この男は私の横に返り咲いていた

————嫌いだ。私は、新の事が嫌いで嫌いでたまらない

「私は平和な学生生活を送りたいんだ！毎日毎日、お前の為に叫び続ける生活なんてもうごめんだ！！」

「お、俺の為・・・な、なんか照れる／＼／」

「自分に都合のいいとこだけしか聞き取ってない！！？」

「わ、分かつた！俺、あやりの為にがんばるから」

「なにを！？」

「もつとあやりに、”俺の為に”色々してもらえよう、がんばる
！」

「がんばるなっ！頼むから。お願いだから！！」

「とりあえず、いつしよに教室まで行こつか」

「お前さっきまでの話の展開、丸無視したな！」

「ほら、早くしないと先生に怒られちゃうよ」

「い、いやだつ。お前といっしよにいるくらいなら死んだ方が・・・
」

「死んだら駄目！！死ぬなんて言わないで。冗談でも絶対に言わないで！！」

「っ！ちよ、肩いたい！」

「・・・言わない？もう、死ぬなんて言わない？」

新が真剣な目で私を見てくる

とりあえず私は、早く肩にかけられた手を外してもらいたかったの
で早々に返事をする事にした

「い、言わない。言わないから・・・」

「ほんと？約束だよ」

「分かった！分かったから放してっ」

半ば強引に新の手を振りほどく。この男は私の”死”という言葉に
なぜか敏感だ

他の事では何を言われてもへらへらしているのに”死”という単語
を口にするると真剣な、追いつめられたような顔をして私に迫ってくる

その理由がなんなのか、私は知っている

何せ、私はこいつに”死”の恐ろしさを教えた張本人なのだから

そして、私は”それ”がきっかけでこいつの事が嫌いになった

「・・・とにかく、離れて歩いて。私の半径3メートル以内に近寄
らないで」

「やだ！そんなに離れて歩いたら俺、さびしいよ」

「私は寂しくも何ともないし、寧ろさわやかだ」

「つつつ！?!そ、そんなぁ・・・」

新が涙目になりながらもこれ以上は無理だと感じたのか、私から距

離をとつていく・・・と、言ってもやはりその差は3メートルも離れていないのだけれど

私はため息をつきながらこれから3年間、お世話になる校舎を見上げた

(どうか、このストーカーバカといっしょのクラスにだけはなりませんように・・・)
そう、祈るように

第一部 第二話

・・・・・・・・・・・・・・・・最悪だ

「あ・や・りーっ。あやりあやりあやり〜」

なってしまった・・・このストーカーと、一緒のクラスに、なってしまった

あの後、結局私は新と一緒にクラス割が書かれた掲示板を見に行く事になり、そこで、新学期早々の絶望を味わった

しかも、名前の関係で私の出席番号はこいつのすぐ後

つまり、席順が他の学校と変わりなく、出席番号順に決められていた場合。私はこの男のすぐ近くに座らなければ行けない訳で・・・

10

多分今、私の顔はこの世の終わりを迎えたような顔をしているに違いない

それに反比例するかのようにして、隣で騒いでいるこの男の顔は生き生きとしているから

「てか、だまって。うるさい」

「あ、ごめん。あやり、怒った？」

「いや。怒る怒らない以前に絶望してる」

「っっ!??ど、どうしたのあやりっ?何があやりをそこまで苦しめるの!??」

「あんだ以外にその原因がいたら逆にすごいと思わない？」

「え？俺？」

「そ、あんだ・・・」

「つつやつたあああああああ！！」

「・・・は？」

「だってさ！！あやりをそこまで悩ませてるのは俺なんでしょ？つて事は俺、それだけあやりに思われてるってことだよわっ！うわー・

・・嬉しいなあー・・・／／／」

「ただだけポジティブなのよあんだは！？そのプラス思考、全国各地の鬱病患者に分けてあげたいくらいよ！！」

「／／／えへへ。今日はあやりがいっぱい褒めてくれる」

「・・・貶されている事さえ分からないのか、あんだは」

半ばあきらめながら自分の名前が書かれてある下駄箱を探し、その中に革靴を押し込む

と、ここで。先ほどよりさらに多くの視線を感じる

それと同時に、今度はひそひそ声も

（女子だ。女子がいるぞ）（ああ、そう言えばここ、共学校だったな）（お前声かけるよ。なんか反応してくれるかも）（つな！お前が行けよ）（つか、ほせーな）（胸ぺったんこー）（いや、俺は行けるよ。足の形いいし）（髪長いか女って感じがする）（つか、横の男誰？彼氏か？）（いや、さっき言い争ってるの見たぜ）・・・

などなど、ちよつとしたパンダ状態だ

そんなにこの学校に通う男子は女子という生き物が珍しいのだろうか？女の人なんて学校の外に出ればいくらでもいるというのに

「・・・どうしようかな、あいつら。喉つぶして声が出せないようにした後、内蔵でも引きずり出そうかな」

横ではストーリーカーがストーリーカーの域を通り越して犯罪計画を練っていた

しかし、なんておぞましい事を考えるんだ？この男は・・・

「ねーねー。君、二組の女子だよな？」

いきなり後ろから声をかけられて立ち止まる。と、同時に新が私の前に立ちふさがるようにして回り込んできた

私の身長は残念なことに、未だに140代。対するこの男は178センチと高身長。故に、前に立たれると話しかけてきた人間の顔がまったく見えない

「お前、あやりに何の用？用がないならどっか行ってくれ」

「嫌々、用があるから話しかけたんだけど・・・君、あやりちゃんの彼氏かなんか？」

「あやりを気安く」ちゃん”付けするな！あと、俺は彼氏じゃなくてあやりの旦那だ！！」

「恐ろしい嘘をさらつと言って退けるな！！違うよつ。違うから！こいつはただの腐れ縁と言つかストーリーカーだから！！」

「え？そうなの、なんか仲が良さげだからってつきり付き合ってるのかと思つてた」

そう言つて初対面で私の事をいきなり”ちゃん”付けで読んできた男が新の体をかいくぐり私の前に姿を現した

その男の第一印象は”チャラ男”

金髪にピアス。ボタンも3つあけで、そのクビにはネックレスがぶら下がってる。顔もなかなかイケメンで遊び慣れていそうな雰囲気を持っている

「へえ……あやりちゃん、かわいいねー。今度俺とデートしない？」

「いやだ」

「うっわ、即答！？なんでー？」

「チャラい男、きらい」

「こーら。人を見た目で判断しちゃ行けないって、先生に習わなかった？」

「見た目で判断されたくないんだったらそんな恰好、しなければいいでしょ」

「……つぶ！あはは！あやりちゃんサイコーッ！イイよ。すごくいいよ、あやりちゃん」

「おい、金髪頭。あやりにそれ以上近寄るな」

「いや、お前もな」

「つぶ、くく……おもしろっ。すっごく面白い突っ込み！いや、ごめんね、いきなり。俺、高野 幸谷。”こーや”でいいよ」

「……栗原 彩里」

「へ。あやりちゃんって、”栗原”って言うんだね。名前もかわいいー」

「おい！お前、それ以上近寄るなっっていっただろ。脳天かち割るぞ」

「うわ。こっわいストーカー君だね。名前は？」

「お前に名乗る名前なんてないか」

「これは神代 新。一応、私の幼なじみでれっきとした”ストーカー””と言っなの犯罪者」

「ちよ、あやり！？」

「ん？何か私、悪い事した？」

「い、いや、してないけど……あと、何度も言うように俺は”ス

「トーカー”じゃなくて”愛の奴隷”だつてば」

「心の底から気持ちが変わるい」

「き、気持ち悪いって・・・つつ！？なんで？俺のどこが気持ち悪いの？俺、一つずつ直していくから〜っ」

「あえて言うのなら、存在そのもの、だね」

「つつ！？」

新がショックを受けたのか廊下の隅で縮こまり、めそめそと泣き始める。それを見て、こーやが”たまらない”と言うように「ブフツ！」と吹き出しながら笑い始めた

「や・・・ヤバいつ。おもしろ・・・おもしろすぎるよ二人とも！」

「私としてはこのストーカーと一緒に立場にされるのが半端なくいやだ」

「つくく・・・。ホントに新君の事が嫌いなんだね、あやりちゃんは」

「さつきから言ってるでしょ？」

「ああ、そうだった、そうだった・・・ねえ、俺ら友達にならない？俺も実は二組なんだ。ねえ、一緒に高校生活をエンジョイしよう」

「別に(どうでも)いいよ」

「・・・うん。(括弧)の中の言葉が聞き取れただけに手放しには喜べないけど・・・ま、改めてよろしく。あやりちゃん」

「うん。よろしくー」

「！！？な、なんで！？なんでこんな見るからに頭悪そうな奴と友達になんか成るの！？俺と言うものがあるのに！！！」

「うるさい。寝言は寝ていって・・・あ、やっぱり寝ても言わないで」

「つつ！！？」

「つぶ、あはは！！ヤツベ、このやり取りツボる〜っ！」

うるさい。ただでさえうるさわしいのに、よけいにうるさい人間が増えてしまった。安易に友達になるなんて言わなければよかったな。

しかし、時既に遅し

こーやは既に親友顔で私たちに話しかけながらついてきている

・・・まあ、この厄介なストーカー幼なじみみたいな男でなければそれでいいか

そんな事を思いながら私はただ、ひたすら無心に二人の声を聞き流しながら廊下を進んでいった

第一部 第三話

パシャツパシャツ！ピロロピロロオ ピコーン！カシャツカシャツ！！パシャツ！ピロリン

「・・・・・・・・」

う、うるさい。さつきからカメラのシャッター音しか耳にしていな
い気がする

教室に3人が入ってから約5分が経過していた。誰かからの情報を
聞きつけたのだろう。1年二組の教室の外はカメラや携帯を手にし
た男の群れであふれ返っていた

「・・・ねえ、あやり。あの”ゴミ”捨ててきたいんだけど、いい
？」

「人間をさらつと”ゴミ”呼ばわりするな。まあ、確かにうるさい
とは思うけど・・・」

「あ、やっぱり！？あやりもそう思うよね！！えへへ・・・あやり
と同じ事考えちゃった」

「新、もう喋らないで。悪寒しか感じないから」

「えっ！？あ、あやり寒いのか？もしかして熱があるんじゃない？」

「つつな！！ちよつと、やめてよ！顔を近づけないでっ！！」

「でも、近づけないと熱があるかどうか分からないよ？」

「大丈夫だから！もし万が一熱があつたとしてもあんたには頼らな
いからっ」

「そっそんな！？これじゃあ、あやりが熱出して倒れて俺が家まで

看病に言っておかゆ食べさせたり熱冷ましシート取り替えたりあわよくば寝ている間にキスの一つでもしてやるうってという計画が・・・

「もし事故にあって入院してもお前にだけは知らせない!!」

「・・・ねえ、新君。いつも二人はこんな感じなの？」

新と言い合いをしていると、こーやが私たちの間にひよこつと顔を出してきた

「フツ・・・まあね。俺とあやりはいつでも仲良しの夫婦だからねっ!!」

「黙れストーカー。違うよ。いつもこんなだったら頭も喉も壊れちゃうよ」

「大丈夫だよ、あやり。もし、あやりが壊れても。俺はあやりを愛し続ける事ができるよ!!」

「私はそんなのごめん被るけどね」

「もしあやりが凶悪犯にバラバラ死体にされても、俺はあやりの体を全部かき集めて今までと同じように愛するよ」

「壊れてる!! 思考も行動も全てが壊れてるよ!!」

「て、というか怖いね新君。凶愛はやめといた方がいいよ」

「なんで? いいじゃないか! 凶愛!! その人一人を思うがために壊れる事ができるんだよ? 素敵な事だと思わない!？」

「ごめん、思わない。てか、思えない。もつと言つと、思いたくない」

「じゃあ、こーやはどういう恋愛が普通だと思うんだい？」

「俺? そーだなー・・・。一緒にいるだけで嬉しくなつて、楽しくなつて、笑いが自然にこぼれる。そんな感じかな？」

「じゃあ俺のあやりに対する恋愛感情は正常だね。俺はあやりがこの世にいると思うだけで毎日幸せだもん」

「・・・ふーん。そっか」

「ああ、そつだよ。だから俺は毎朝、あやりの存在を確かめる為に

あやりの布団に忍び込んでい」「うあああああああああああ
!!!」

「!?!?あ、あやり?どうしたの?そんな大声出して」

「ひ、ひひっ!人前でそんな事言うなあっ!大体、忍び込むなって
毎回毎回言ってるだろ!!」

「うーん・・・でも、これだけは譲れないんだよな」。朝、あやりの
顔を見ないと俺、一日を生きられる気がしないもん」

「そんな気、一生起きなくていいと思う!!」

「・・・やっぱり、仲いいよ。二人とも」

こーやが二人に聞こえないように内心でそう、つぶやいたとき

「おい、その男!!お前邪魔!」

「お前がいると撮影できねー」

「栗原 彩里のそばに寄るな!!」

「つーか、本人。お前の事嫌がつてんじやん」

「男は引つ込め!」

「1年がしゃしゃり出てんじやねーぞ!!」

そんな、教室外で撮影をしようとしていた男子生徒達からの苦情の嵐

「・・・いや、てか。人の写真を勝手に撮らないでください。さっ
きからピロピロうるさいです」

「うおおおおおー！毒舌もいいね〜」

「動画！今の動画でとった奴いたか！？」

「駄目だ！ビミョーなところでちようど入ってねえ！！」

「つくそ！スイマセーン！もう一回さっきのセリフお願いしまーす

！！！」

「人の話聞いてましたあ！？」

「おおー！ナイス突っ込み！」

「よっしゃあ！今度はちゃんととれたぜ！」

「まじで！？ちょ、見せる見せる！！」

「まてまて、押すなつて」

「ほお。この赤くなっている頬がまた・・・」

「どれどれ？おっほんと。いい感じじゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なるほど、これが所謂”パンダの気持ち”って奴か。パンダ、お前も日々苦労してるんだな・・・

と、そんな諦めに似た気持ちでパンダの気持ちをくんでみると、いきなり視界が暗くなった

一瞬驚いているとすぐに「大丈夫だよ。あやり」と言う声がして頭に大きく少し暖かい感触

私の視界を遮ったのは新のブレザー。そして、頭に触れたのは奴の手のひら

通常ならばここで大抵の女子は恋に落ちる事ができるのだろう。しかし、それをした男の事が心底嫌いな私の体には”さぶイボが出る”以外に何も起きなかった

「つぶ、くく・・・。あやりちゃんも酷だね〜。ここまでしてもらってさぶイボしか出ないなんて」

「嫌いなものは嫌いだ」

「うーん・・・なんであやりちゃんはそこまで新君の事が嫌いなのですか？」

「大嫌いだから」

「だからどこが？新君、かつこいいし、さわやかイケメンだし・・・それに、あやりちゃんに相当惚れ込んでよ」

「イケメンだろうが不細工だろうが関係ない。私は、あの男がだいっきらい」

「・・・幼なじみ、なんだよね。嫌いなのは昔っから？」

「うん」

「出会った最初のおきから？」

「・・・うん」

「そ、っか」

—————ちがう

最初は、違った

普通の友人として接していた

けど、”あの時”を境に、私はこの男を拒絶した

自分でもいい加減、許してやればいいと思う。けど、その想いとは裏腹に、その事を思い出すだけで苦しくなる自分がある

その度に”嫌い”と言う感情がたくさん、体全体を駆け巡る

「すみませーん。あやりの写真、それ、全部処分するか俺にくれるか、どっちかにしてもらえませんか？」

新が教室の外にいる男子の群れにそう言って微笑みかける
その仕草はどこからどう見てもさわやかな好青年そのもの

「ああ？何言っただてめえ」

「お前ただのストーカーだろ？」

「誰の許可もらってそんな事言っただよ」

「それはこっちのセリフですよ。このウジ虫ども」

「」「」「」
「」「」「」
「」「」「」

新がさわやかな笑みを少しずつ崩しながら本性をさらしていく

「あなた達みたいな世界の底辺がなんで俺の大切な人を勝手に視姦してんだ？ありえないよね？すつごくありえない。その雑菌まみれの体も顔も中身も視線も持ち物も、俺のあやりに近づけないでくれる？」

沈黙

一時の静寂が教室内を包む

・・・そして

「んだとっ！！てつめえっ！！！」

「ふざけんじゃねーぞ、このくそガキ！！」

「おい！てめえ、ちよつとこつち来い！」

「センパイに逆らったらどうなるか・・・体で教えてやるよ」

「あはは。新君ってDMに見せかけた鬼畜DSなんだね・・・」

当然、赤の他人。しかも、今日入ってきたばかりの後輩にそんな罵詈雑言を言われてダメツっていられる訳がない。しかも、ここはその劣悪な生徒達の質から今日学校であるにも関わらず、女子生徒が一人も入学してこなかった事で有名な今時珍しい不良校。もちろん、ご多分に漏れずここにいる生徒達も皆血気盛んな者達だった

ゾロゾロと生徒達が、時には威嚇なのか、机や椅子を蹴り飛ばしながら教室内に入ってくる

と、こうで

「逃げてください」

あやりが言葉を発した

「皆さん、逃げてください。お願いです。私は無闇に人が殺されるところを見たくありません」

「・・・は？何言ってるんだ？」

「だからっ！！私は流血沙汰はごめんだと言ってるんです！！」

「何、こいつの心配してるの？やっぱり何打間歪痔って幼なじみだから」

パキユツ！！

そんな音がしたのはこの男が喋っていた途中

けれど、今その男はなぜか宙を飛んでいて、口からは赤い液体。動体視力が平均より良い者には白目である事も見て取れただろう

「っや！やめてよ、新！！やめてっ！！」

「あ、そっか。ごめんね、あやり、あやりの見えないところで作業するから安心して」

「いや、その前に手加減とかそう言う者を覚えてよ！あの人、3メートルは飛んだよ！？」

「えー、なんで？だって、汚物のくせに俺の大事な大事なあやりを見たんだよ？撮ったんだよ？勝手に人の大切な物、その汚れきった目で犯したんだよ？そんな奴ら、グチャグチャの肉塊にして野良犬に食わせても文句は言えないんだよ」

新の言葉にその場にいる全員が寒気を覚える

冗談なんかではない。威嚇でもない。そこから見て取れるのは純粋な殺意

もはや、この少年に意見する事ができる男は誰一人としていなかった。この人間に言葉をかける事ができるのはあやりだけだった

「あんだね・・・その”グチャグチャ”にしたあとの事、考えた事あるの？」

「え？ないよ。だって、俺はあやり意外どうでも良いもん。あやりさえいれば万事オーケーだもん」

「オーケー。じゃ、ないよ！！誰が後片付けすると思ってるのよ！公務員さんが大変じゃない！」

（（（・・・えー。そつちー？）））

教室内にいた生徒全員があやりのこの言葉を聞いて内心でそうつぶやいたのは言うまでもない

「それに、こんな殺されたらたまったものじゃないよ。こんな人たちでも家族とか友人とか・・・ちゃんと悲しむ人がいるんだから」

「・・・」

「わーお。あつやりちゃん、やさしいね」

「つな！？ふ、普通でしょ」

「あ、照れてる。かつわいい」

「！！！？／／／」

「・・・おい、こーや。お前、その首、ねじ切るぞ」

「あはは、ごめんごめん。この役目は新君のものだったよね。つい言っちゃった」

「今度言ったら殺す」

「？あれ、今じゃないんだ」

「お前は一応、あやりの友人だから。お前みたいなくそでも殺したら、あやりが泣く」

「・・・ほんと、新君はあやりちゃんが大好きなんだね」

「何を今更。俺とあやりは相思相あぶふっ!？」

「誰がだ!!そんな寒気しかないような単語、近距離で発するな!!！」

「あはは。思わず殴っちゃう程恥ずかしかったの?ほんと、あやりは照れ屋なんだから」

「どう見ても私、怒ってるよねえ!？」

「うん、怒って必死になってる顔も可愛い・・・」

「い、いやああああああ!!よ、寄るな、触るな!!！」

教室内に入ってきた生徒達が”今のうちに”とでも言うように、そこそと教室から出て行くこうとする

が、それを

「あ、ちよつと待ってくださいよ〜」

ゴシヤツ!!!

鉄のひしゃげる嫌な音

新がて時かにあつたいすを入り口に向かって投げたのだ
それを見て逃げ出そうとしていた生徒達の足が止まる

「今度、俺の大事な人手でも足でも視線でも出すものなら・・・つぶしますからっ」

そう言うてにっこり笑う新

数秒後恐怖に打ち勝ったもの達から順々に、転げるようにして教室から逃げ出て行く。やがて、一人としてその場にたっているものはいなくなり・・・

「うん、よし！」

「よし、じゃないよ！！なんてことしてくれるの！？これじゃあたし友達で着ないよつ。見てよ、クラスメイト、誰一人として目を合わせてくれないよ！！？」

「だいじょーぶだよ、あやりちゃん。俺がいるよ〜」

「あたしは、せめて2、3人は友人が欲しかったの！」

「俺を合わせると2人だよ。・・・あ、そっか。俺は”友人”じゃなくて”旦那様”だもんね」

「・・・もう、突っ込むのも疲れた」

「あらら。あやりちゃん、スタミナ切れしちゃったねー」

「おい、寄るな、あやりの疲れた顔を見る事ができるのは俺の特権だ」

「・・・」

入学初日

教室に入ってからわずか25分

私は早々に家に帰りたくなっていた

第一部 第四話

「おーし、席に着けー。お前ら、今日はこれで終わりなんだから早くしろー」

そう言つて教壇に立つのはヨレヨレとしたスーツをだらしなく着ている若い教師。雰囲気だけで言つと”教師”と言つより”ホスト”に近い気がする

「えーつと、なんだ・・・見ての通り、俺がお前らの担任だ、名前は佐々木 洋介。24歳独身。キレーなオネーサンがいる人はソッコーで俺に紹介しろ！これがお前らの最初の宿題だ。あ、あと担当は英語な。お前ら、赤点とるなよー。再試作るの面倒だから」

・・・なんだか、教師とは思えない発言がさつきからやたらと聞こえる

「センセー。センセーは本当に教師なんですか？」

「なんか、全体的にうさんくさいでーす」

ああ、よかった。そう思ったのは私だけじゃなかったらしい

「うるつせえなあ。お前らガキに心配される程、落ちぶれちゃいねーから安心しろ」

「センセー。教師が生徒にそんな暴言はいてもいいーと思ってるんですかー？」

「うったえますよー」
「うるせーよ。んなことでいちいち訴えててどーするよ？お前、だつせーぞ。ほんとに男かぁ？チ コついてねーんじゃ・・・っと、すまねえ。そういやここ、今日から女子いたんだった・・・」

佐々木先生が私を見ながら、先程のとても教師とは思えない言動について詫げる

「いえ、別に。気にしていないんで大丈夫です」

「え、マジで？怒ってない？」

「は、はい。全然・・・」

「だとさ。ヤローども！許可が出た！！栗原は俺らが下ネタ連発しようが、エロ本読みまくろうが、夏に半裸で教室内を闊歩しようが、全然”気にしないそうだ！！”

「・・・うおおおおー！！！！！！！！！！」

「いや、誰もそこまでは言ってますんよ！？」

「ん？なんだ。ちがうのか？」

「違いますよ！さすがに下ネタ連発は困ります！！」

「じゃあ、どこまでなら良いんだ？個人的には100禁くらいまで許してほしいんだけど・・・」

「いや、駄目ですって！！ていうか、100禁ってなんですか！？」

「なんか響きがお手頃じゃない？」

「いや、そんな事言われても・・・」

「ほら。何事も包み隠さず、ありのままの言葉で人とのコミュニケーションをとろうって言う」

「単体で聞くと良い言葉ですね」

「あー、分かった！じゃあ妥当な感じで35禁で」

「大幅に減ったけどそれでもまだ多い！！」

「えーなんでだよ。何がそんなに不満なんだよ？」

「先程の言葉、全てです!!」

なんなの、この教師。ほんとに教師!?

「お言葉ですが、先生。あやりで遊ばないでください。その口、閉じないようなら生ゴミをぶち込んでそのまま焼却炉に捨てますよ」

「ほお・・・さつき二年の奴らが話してた通り過激だな、神代 新」
「ええ。俺はあやりを愛してますから」

「うっわ、若えなあ。つかお前、ほんとに日本人?」

「俺は生まれも育ちも日本ですよ。この言動は全て、あやりを思うがため。本来ならば言葉だけじゃなく体を使ってそれを表したいのですが・・・」

「っっ!!」(ブンブンブン!!)」

「・・・この通り、本人がかなりの照れ症なので止めておきます」

「いや。それ、どー見ても拒否の仕草だろ」

佐々木先生が私の表情を見てそう突っ込む

よかった、どうやら人並みには他人の気持ちを読み解く事ができる人物らしいー

「まあ。抵抗された方が調教のしがいがあつて、なんか萌えるよな」
「先生のおっしやる通りです」

「あんたほんとに教師ですか!? さつきから教師以前に人間として最低の部類に入る言葉しか言ってますんよ!？」

「栗原。人間はな、他の奴らと違う思想や感性を身につけ、それを表す事により進化して行くものなんだぞ」

「人と違う思想や感性を開発する前に常識を身につけてくださいっ
!!!」

「お、良ーこと言っな。褒美にチョコやろう、チョコ。昨日でた新

発売のやつ」

そう言つて佐々木先生が私にチョコを手渡してくる

「バ、バカにしないでくださいよつ。こんな、小学生じゃあるまいしお菓子でせいと懐柔しようなんて（もぐもぐ・・・ごくんっ）そんな手には引つかかりませんから!!」

「・・・いや。めっちゃ嬉しそうに俺のあげたチョコたべてたよな」「!?し、しまった!ち、違いますよつ。今のはチョコが悪いんです!あんな甘つたるくておいしい茶色の固形が口の中に入ったからすぐおいしかったです。どこで売ってましたか?」

「・・・駅前のコンビニだ。限定発売だから帰りに買ってきたら?」「駅前のコンビニですね。ありがとうございます!!」

「うわ・・・近年まれに見る良い笑顔だな。俺、チョコ一つでこんな嬉しそうな笑顔する奴初めて見た・・・つて、おわっつ!?!」「・・・ツチ。あ、すいません先生。手が滑りました」

「お前、手を滑らせて体に風邪を感じる右ストレート決めるの!?!?めっちゃ頬に鋭いやつ感じたんだけど!!」

「俺のあやりに・・・手え出したら殺す」

「どこまで包み隠さない奴なんだ、お前は!!」

「センチ、大丈夫?新君、あやりちゃんの事になると狂戦士に成るから気をつけて」

「うん。もうちょつと前に忠告してほしかったぞ、幸谷」

「アレ?先生、俺の名前知ってんの?」

「当たり前だろ、担任なんだから。お前らの名前くらい名簿をもちたその日にちゃんと覚えた。一応、それも仕事のうちだしな」

「・・・へへ。ただの見た目ホストな人じゃなかったんですね」

「うるせーよ、見た目チャラ男」

「だいじょーぶです。俺は見た目だけじゃなくて、中身もちゃんとチャラ男です!」

「そんな嫌なカミングアウトするなよ。・・・あー、もう埒があか

ないから今日はこれで終了。帰ってこのプリントちゃんと読んでい。結構マジな連絡次項書いてあるから。はい、以上！じゃ、てきーとーに、神代。号令かけて」

「・・・それは“もうめんどくさいからこいつを委員にして俺は楽しよう”って、魂胆ですね」

「そうだー。その通りだ。先生は物わがりの良い生徒が大好きです」

「俺はあやりだけに”大好き”という言葉を言われたいです」

「黙れー。このストーカー」

「先生、脳みそくりぬきますよ？」

「新、変な発言は謹んでね。あと、ストーカーどっか行け」

「あ、ごめんね、あやり。俺、あやりを怒らせるような事言っちゃったんだね。帰りにチヨコおごるから」

「・・・とりあえず、早く号令かけろー」

新が先生に促されて号令をかける

そうして、入学して最初のホームルームらしくないホームルームは終わった

第一部 第五話（前書き）

時間軸にちょっと戻ります

第一部 第五話

突然ではあるが

ここ、私立師範高校には”番長”なるものがいたりする

その人物は身長190センチ、体重100キロ越えの巨漢で黒の長ランを身にまとい何時もなぜか下駄を履いている・・・

なんて事はなく、見た目は至って普通の男子高校生である

・・・いや、”普通”よりも姿形の整った男子高校生だった

身長は180代の細身であるが、その体には引き締まった筋肉がついていた。どこか異国の血が混ざっているのか肌は浅黒く、鋭い瞳は緑がかっており髪の毛は見事なまでの銀髪である

”番長”というよりも、見る人によってはその整いすぎた容姿から”悪魔”と噂されていた

そして、この”悪魔”は今悩みに悩んでいた

それは――――

「暇だ」

”悪魔”——もとい、私立師範高校の”番長”笠原 時音がそう
言つてため息をつく

彼が今いるのは校内にある空き教室

室内には小さい薄型テレビにソファ、テーブルまであり、もはや彼の
自室といつても過言ではない

「あー、暇だ。退屈で退屈で仕方がねえ」

「左様でございますか」

そう言つたのは彼の腹心であり、幼なじみ兼、実家に使える執事で
もある更級 蔵曰

何事においても冷静沈着で笠原の命令に忠実に従う少年である
今、更級は笠原の言葉を聞きながら日課であるお茶の準備をそつな
くこなしていた

「この前、ここら一体の高校全て制圧してしまつたからなあ・・・
もうやる事がなくなつた」

「先程、旦那様から”やっておけ”と言われた書類は・・・」

「さつき片した。俺の机の引き出しに入ってるからあとで親父に渡
しに行つといて」

笠原が実父から渡された書類・・・それは実父の経営する企業が今
度手がける事になつてゐる新事業に関する報告書とそれに対する対
策案であつた

普通ならば高校生に任されるような代物ではない

しかし、彼にはそれが一任される事もあった

彼は、所謂”天才”だったのだ

物事を瞬時に覚えそれを活用する能力を持ち、運動面ではオリンピックの代表候補生として選ばれ、美術面においても他人とは違う個性的な感性を発揮し、外見においてもどこに出ても恥ずかしくない笠原 時音と言う少年はそんな”神童”だった

故に、彼は退屈だった

勉強は努力をしなくても満点を取れる

運動は練習をせずとも一位になれる

下手に飾らずとも周りからもてはやされる

色々なものに手を出した

けど、それらの多くが長くは続かず終わった

ピアノ、バイオリン、バレエ、水泳、書道、華道、茶道、柔道、空手、少林寺、テコンドー、釣り、フェンシング、剣道、琴、ギター、オペラ、クラブ、夜遊び、ゲーム、ラノベ・・・

周りにある全てのものにがむしやりに手をつけていった

けれど、それら全てはすぐに終わりが見えた

そもそも、頭のいい彼がこのような不良校に入学したのも”喧嘩”なるものをしてみたいと思ったからである

その結果、彼は入学当日で師範高校を統一し、一ヶ月後には同地区の学校全て。半年後には県下全ての不良校を制圧。この前、関東制覇をしたばかりであった

それを見かねた彼の父が「何時まで下らない事をしているのか!」と、言つて二ヶ月程前から修行と称し、ゆくゆくは彼のものとなる会社の手伝いをさせ始めたのだが・・・

・・・結果、高校生にして会社の重役を任されたのだ

「かしこまりました。・・・しかし。流石でいらっしやいますね、時音様は。この歳で旦那様の経営される企業の一重役と同等の作業をこなされるとは」

「？そうか？最初はそれなりに難しく楽しんでただけだな・・・今じゃ馴れちまって、おもしろみがなくなってきた。親父の奴、もっと楽しそうなもん持ってこねーかなあ」

「・・・。・・・さすが、私が一生お使えすると決めた主です」

更級がそう言っつて笠原の前に紅茶と茶菓子をおく

笠原が「ああ、今日はガトーショコラだな」と言っつてから紅茶に口をつけた

「・・・うん、うまいな。これで少しは退屈な気がそれそうだ。ありがとう」

「もったいなきお言葉」

更級がそう言っつて深々と頭を下げる

と、それから一泊おいて廊下から騒ぎ声が聞こえてきた

どうやら複数人のようだ。ドタドタと走る音が大きくなっていくそして、その足音は笠原達がいる空き教室前で止まりバンツと盛大な音を立ててドアが開かれた

「笠原さん、たいへんです！！」

「ニュースですよ、ビッグニュースっ」

「ヤバいっす、マジヤバいっす！！」

「もうヤバすぎてヤバすぎるんす」

「これは冗談抜きでヤバいですよっ！」

「いや、もうほんと、マジヤバいです!!!」

「・・・不躰に入ってきて俺の日常における唯一の楽しみをぶっ壊した上になんだ？その頭の悪い語学力のなさすぎる報告は」

「あ、お茶中だったんすか。すいませんっす」

「で、でも笠原さん。今日の報告はマジでヤバいんすよ!!!」

「ヤバイヤバイばかり言っつてないで早く話を進めろ。要点だけ言え」
「す、すみません!!!その、実は・・・うちの学校に女子が入学して来たんす!!!」

「・・・それだけか？」

「え？」

「それだけか？お前は女子生徒が学校に入学してきたなんて平凡な事を伝える為にここに来たのか？」

「へ、平凡って・・・ここ、今日まで共学校のくせに女子一人いなかった不良校ですよ？」

「そこに初の女子生徒、しかもなかなか可愛い子が入って来たんすよ」

「これは由々しき事態っすよ、番長!!!」

「何がどう」由々しい「んだ。下らん。女なんてそこらへんに沢山いるだろっ」

「」「それは笠原さんだから言えるんです!!!」

手下の生徒達が悲痛そうな声を上げて笠原に抗議をする

「当然です。時音様をあなた方のようなもの達と一緒にしないでもらいたい」

「更級さん、追い打ちはひどいつすよ」

「二人ともイケメンだから良いかもしれねえっすけど、俺ら何の取り柄もねーし」

「身近な子にアピールしなきゃ彼女なんてできませんよ」

「そうですね。あなた方にできる事と言えばせいぜい、この部屋にあるゴミを焼却炉に持って行く事ぐらいです。と、言う訳で、ゴミ捨てをしてきなさい」

更級がそう言っつて大きなゴミ袋を彼らに渡す

手下達は「ひどいつ」「横暴だっ」などと言いながらも素直にゴミ袋を持つて外に出て行った

「まったく・・・うるさわしい人たちですね。すみません、時音様。紅茶がすっかり冷めてしまいました。今すぐ新しいのを・・・時音様？」

更級が紅茶を新しいものにしようとして笠原に話しかけると、当の本人は何やら考え事をしていた
と、すぐに何かを思いついたらしく、にやりとした笑みか更級に向ける

「・・・クラウド。良い暇つぶしを思いついた」

「左様でございますか」

「ああ。久しぶりに退屈をしなくてすみそつだ」

「して、内容は？」

「俺はこれから」件の女子入学生をこの学校の男子生徒全員が争奪する」と言うゲームを仕掛ける」

「なるほど。恋愛シミュレーションゲームを三次元で行うのですね」

「そうだ。俗にいう、逆ハーレムを作り上げるんだ。俺のキャラクター設定は・・・そうだな、”冷血な学校の俺様番長”と言ったところだな。クラウド、お前は俺の右腕役だ」

「ありがたきしあわせです」

「よし、そうとなれば早速人員を集める。まずは大勢の人間を使ってその女子新入生に”この学校の男子がどれほど女に飢えているか”と言う事を印象づけるんだ」

「かしこまりました。では、早速そのように」

「ああ、頼む。ふふ・・・楽しみだな」

笠原が心底楽しそうな――例えるならば、新しいおもちゃで遊ぶ寸前の子供のような顔をして笑う

そして、主の楽しそうな笑顔を目にした更級もまた執事らしく、控えめな笑みをこぼした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0217x/>

だいつきらい！！

2011年10月24日02時04分発行